

昭和二十五年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

（通第十九號）

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈

光

第二卷・第十號

至心・信樂・欲生の聖人の御自釋……………（1）
目

如來の作願……………：白井成允（2）

法喜に思ひ上る心……………：山下成一（8）

愛別離苦を縁として……………：三瓶徳英（11）

信味點滴……………編者（13）

次

至心・信樂・欲生の聖人の御自釋

佛意はかり難し。然りと雖もひそかに斯の心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なく、虛假詣偽にして眞実の心なし。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じ給ひし時、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなく、眞心ならざることなし。如來清淨の真心を以て圓融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就し給へり。如來の至心を以て諸有の一切・煩惱・惡業・邪智の群生海に廻施し給へり即ち是れ利他の眞心をあらはすが故に、疑蓋まじはることなし。斯の至心は則ち是れ至徳尊号を其の體と爲せるなり。

信樂といふは、則ち是れ如來の満足大悲・圓融無碍の信心海なり。是の故に疑蓋間雜あることなし。故に信樂と名く。即ち利他廻向の至心を以て信樂の體とするなり。

然るに無始より已來、一切群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて清淨の信樂なく、法爾として眞実の信樂なし。是を以て無上の功德值偶し難く、最勝の淨信獲得し難し。一切凡小一切時の中に、貪愛の心當によく善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を焼く。急走急修して頭燃を炎ふが如くすれども、すべて雜毒・雜修の善と名け、亦虛假・詣偽の行と名く、眞実の業と名けざるなり。此の虛假・雜毒の善を以て無量光明土に生ぜんと欲す、此れ必ず不可なり。何を以ての故に、正しく如來、菩薩の行を行じ給ひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋まじはることなきに由りてなり。斯の心は即ち如來の大悲心なるが故に必ず報土の正定の因となる。如來苦惱の群生海を悲憫して無碍廣大の淨心を以て諸有海に廻施し給へり。是を利他眞実の信心と名く。

欲生といふは、則ち是れ如來諸有の群生を招喚し給ふの勅命なり。即ち眞実の信樂を以て欲生の體とするなり。誠に是れ大小・凡聖・定散・自力の廻向に非ず、故に不廻向と名く。

然るに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂没して、眞実の廻向心なく、清淨の廻向心なし。是の故に如來一切の苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じ給ひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、廻向心を首と爲して大悲心を成就することを得たまへり。故に利他眞実の欲生心を以て諸有海に廻施し給へり。欲生は即ち是れ廻向心なり、斯れ即ち大悲心なるが故に、疑蓋まじはることなし。

如來の作願

白井成允

「如來の作願をたづねれば

苦惱の有情をすてすして

廻向を首としたまひて

大悲心をば成就せり。」

今、世間をながめると、苦しみ悩める人々に充ち満ちてゐる。今の世間に生きて誰が苦しみ悩まね者があらうか。人類

の事、國家の事、家族の事、己れの身の上の事、いろいろ考へると、よくも狂はずに生きてをられることが、と思はれる

程である。ただ自分が鈍感であるから狂はずにおられるもの

の、もし有情の有様をそのままに己れに感覺し得たならば、

とてもじつとしてはをられないだらう。むさぼり、いつはり

へつらひ、たかぶり、あざむき、そしり、にくみ、いかり、

ぬすみ、あらそひ、たかひ、人と人との秘術を盡し全力を

挙げて殺しあひ奪いあつてゐる。何といふ痛ましい世相であらう。しかもその痛ましい衆禍の波の中に私自身も居る、と

云ふよりも寧ろこの衆禍の波を荒れ狂はせる源となつて私が立つてゐるのである。私の胸の中に如何に深くそのむさぼり

いつはり、へつらひ、たかぶり、あざむき、そしり、にくみ
いかり、ぬすみ、あらそひ、たかひ、あらそひ、たたかふ情意がひそんでゐるか
見れども見へず、思へども測られざる底無き暗黒の淵の如く
である。しかも其の事を私は感ぜず知らず、常に無明の雲霧にとざされて省みることなく、鈍く／＼過してゐるのである
狂はずにをられるのは鈍いからである。

世を去りたまへる師匠の遺徳を想ひおこし讀へ語るのは美
しい事である。然しさうしてゐる間に私の胸の奥にはひそか
に師匠に護ひ自ら慢ぶる念が萌してくる。之を思ふと泣きた
くなるが、どうすることもできない。私には純粹な念で師徳
を讀へることさへできない。胸の中から永しに汚泥が湧いて
くるので、自ら汚泥を湧かしつつ周囲を汚してゐる事に氣
づかず、ひとかど正しい事を爲して世間を清めてゐるかの如
き氣持である。何といふ顛倒であらう。凡夫の謂ふ常樂我淨
はすべて顛倒であると教へられている事が想ひ起される。
顛倒してゐるから苦惱の有情なのである。随つて、顛倒し
てゐる有情には自分の苦惱の眞相が自分に見へないのである

不眞面目な身でありながら眞面目にならねばならぬと念つてゐる、怨み心を離れ得ない身でありながら離れねばならぬと努めてゐる。いかにも殊勝な心がけのやうに見へながら、実は自分が不眞面目な身であり、怨み心を離れ得ない者であることに氣つかないでゐる顛倒の念であり行である。それならばその顛頭の念や行やを棄てるのだと云つて、不眞面目のままで宜いのだとが怨み心のおこる今までかまはないのだと落着いてゐることができるかといへば、それもまたできない、蓋しさう落着くことはやはり顛倒の見を離れない事なのであつて、既に不眞面目を眞に見てゐない所から來る事なのであるから。此の如く私共の念も行も顛倒ばかりしてゐて、其処から出で離れ得ない。顛倒の凡夫即ち苦惱の有情なのである。

然し「苦惱の有情」とは眞実には私共から出た言葉なので、
はない、私共は眞実には苦惱の自覺をもたないのであるから
其は如來の智慧か。私共を照らし、體となよし悲しみ愁み入

て私共に呼びかけ醒ましてくださる御語である。その御語で祕められた如來の悲愍は際の無い古から私に向つて注がれ來つたのであつたが私は其を見ず聞かず知らずにすごしてきて、そして自ら怨み心を離れ得ない身でありながら、離れねばならないと努めたる、離れずともかまはないと自暴自棄したりして、常に迷ひ惑うてきたのである。偶々善知識の教語によりてこの「苦惱の有情」と呼びたまふ如來の悲愍を聞く。其は私がどうしても不眞面目でしかあり得ない身であり、怨み心を離れ得ない者である事を徹底してお告げくださると同時に

ち御自身も一切衆生も本來同一生命のものであり、本來一如の大生命が諸の因縁に従ひて象を万法と現はしてゐるに他ならぬものである事を御身に証したまゝて、茲に則ち一切の衆生を御自らの「一子」の如く、否、「自己」の如くに感覺したまふのであらう。此の如き境地は即ち如來のおんさとりの境地であり、「一子地は佛性なり、安養にいたりてさどるべし」と仰せられたる如く、また「如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性となづけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて証すべし」と仰せられたる如く、今私共のさとり得る境地ではない。蓋し私共はこの五尺の肉体、五十年の生命を自らの生命の全分だと思ひこんで、此に執着し此に愛着してゐる涙に他ならぬやうであり、何處までいつてもこの小さい自己を離れ得ないからである。之に反して一切衆生を己が子の如く、自己の如く感覚するといふその廣大無辺なる境地こそ如來の境地であり、その境地の故に能く私共を苦惱の有情と知ろしめし、^{ナム}の有情の苦惱を己れの責とおほしめし、己れの生命を捨ててこの苦惱の有情を救はずには措かぬと誓ひたまふのであらう。是の如きが如來の誓であり願であらることを釈迦牟尼佛が私共に顯はし示し御教へくだされたのである。

に、その如き不眞面目の私、怨み心の私を、この不眞面目の故に、この怨み心の故に、あくまでも悲しみ懃れみて捨てたまはず、この不眞面目、この怨み心を必ず救ひあけずには措かぬとお誓ひくださる御聲である。其は私が不眞面目の身であり怨み心の者であることを、私のはるかなる宿業の積み重なれる果報と見、はるかなる將來までも其から離れ得ざる因業と知ろしめして、其の三世流轉の永遠の相において明らかにしたまひつつ、その私の有様を如來御自らの責として御自らの上に担ひ負ひくださる。阿闍世王が己れの罪報に悩めば王もし罪しましまば諸佛世尊もまた罪しますべし、と言ひて王の罪を佛御自らに負ひたまひ、善星比丘が地獄に墮ちれば、佛また與に地獄に入りて其の劇苦を御身に負ひたまふ。如來において智慧はそのまま慈悲であらせられる。有情の苦惱を知りたまふ智慧はそのまま有情の苦惱を御身に負ひ荷ひ救ひたまふ慈悲の御作用であらせられる。

かく如來が私の罪業苦惱の責を御身に負ひくださるといふ事は私からは不可思議の事である、思ひもよらぬ事である。然し其は如來の境界を自ら証せられた釈迦如來の教へたまふ事である。其の境界は一切の衆生を己れの一子の如く感じたまふ「一子地」と称され、その境界においては「諸の衆生に於いて視ること自己のごとくす」と告げられてゐる。蓋し如來の智慧は徧く宇宙に充ち満てる絶対的生命そのもの即ち一切衆生の生命に貫き流れたる根源的生命そのものを些も缺く所無く全く円かに自ら照らし見そなはしてをらしるので、即

界から、其處に満ち溢るる智慧即ち慈悲の御作用をさなが
りに顯はしくださるのである。眞面目に勤め励む者、怨み心
もおこさず他を愛する者を我が國（如來の境界）に選びお
あらゆる者あるといふのではない。算ろ凡夫の境界では、眞面目に勤
め励むといふ念ひ、怨むことなく他を愛するといふ行ひが終
に不可能である事を見抜きたまひ、その不可能な者、不眞面目
でしかり得ず、怨み心を離れ得ざる者、かかる煩惱具足
業深重の凡夫こそ未來際を盡くして苦しみ悩まねばならぬ
者であるのを見抜きたまひ、かく見抜きたまふ刹那に即ち此
の者に対し限り無き同情悲の涙を注ぎたまひ、かかる煩
惱罪業の凡夫をこそ如何しても必ず救ひあけ、我が國におさ
めとりてその苦惱から離れ免れしめなければならぬと誓ひ
たせたまふたのである。自ら努めて眞面目になり眞面目に
生きやうと勵んでいる善人、自ら憤んで他を怨むまいと念じ
ている善人にとっては、この御誓ひは他人事でもあらう。然
るにの身の上に聞くより他にもはや他の道はあり得ない。佛か
ねてしろしめして煩惱具足の凡夫を救はずには措かぬと誓ひ
たせ給うたその御誓ひがまさしくこの私の身上に係つて
ゐたのであつた。こんなあさましい不眞面目の身がこのまま
で佛の御慈悲の中に攝め取られてゐたのであつた。自分が眞
面目になつて佛を信するのではなかつた、如何しても眞面目

になり得ない不眞面目の私を佛様の方から抱き攝めてくださいとされたのであつた。

祖師聖人の御述懐を聞きまつる、言はく、「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案すればひとへに親鸞一人がためなりければそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」と。又言はく、「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と。量り知られぬ業を造り來りて地獄に墮つるより他に致し方なき身を助けんとおほしめしたちける如來の本願にほだされまいらせてただこの本願一つにまかせまいらするより他に別の道を知りたまはざりしが、祖聖の御信心であらせられた。其を祖聖はありのままに告げて、「親鸞におきて、はただ念佛して彌陀にたすけまいらすべしとよきひとのおぼせをかうぶりて信するほかに別の子細なきなり」と仰せられた。則ち祖聖がよきひと法然上人の御教を被りたまひて信じたまうた所は「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらす」道ただ一つ外ならなかつた。「べし」とは法然上人がかく勧めたまうた由を云うのであるから、勧めたまうた内容は上の文の通りである。)

「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらす」とは、念佛するといふ方法によつて彌陀にたすけられるといふ目的を達する、といふのではない。彌陀にたすけられるとは結果から云へば淨土に往生することに他ならぬであらうが、この淨土に往生するといふ結果を目的として念佛する、といふのではなく

の煩惱に盲ひたるわれら、久遠劫よりこのかた今日今時に至るまで嘗て如來の寢滅の境界を知らずして迷ひ漂ひきたれる

われらの能く起こし得る念願でもなく、随つて其を果し遂ぐる行業亦われらの能く修め得る限りでもない。其は如來のわれらを招き喚びたまふ念願であり、其の行業も亦如來がわれらを攝め取り果し遂げたまふ所に成立つものである。其は即ち念佛である。即ち如來の本願がそのままにわれらにはたらき、われらを如來の本願の中におさめられ、本願の中に生きまた死なしめる御作用である。之を「本願の念佛」といふ。之を「本願や念佛、念佛や本願」といふ、本願即ち念佛、念佛即ち本願である。之を「ただ念佛する」といふ。自ら心を清め行を正しうして汚れなく念佛まうすなどといふ自己のはからひ、努力、修養などを些も交ふことなき念佛である。ただかかるあさましき心、散乱放逸どうしやうもなき身を如來かねてしろしめし悲しみ惑れみたまふやるせなき大悲の直ちにわが身に臨みかかりたまふ事よと聞かせていたゞくままにまうす念佛である。清くなりて、眞面目になりて、怨み心を洗ひ去りて、生れかはりて汚垢なく念佛まうすのではなくて、汚れたるまま、不眞面目なまゝ、怨み心の動いて止まぬままに、かかるあさましき身を見棄てたまはず、救はんと誓はせたまうた大悲の御心のわれを呼びたまふ御聲をそのままに聞きまうす念佛である。之を「ただ念佛する」といふ、之を「彌陀にたすけられまゐらす」といふ。「ただ念佛する」ことが即ち「彌陀にたすけられまゐらす」ことであつて、念

い。その念佛も「ただ」念佛するのだ、純粹に念佛になりきつて、心を清め行を正しうして些の汚垢も染まない念佛を申すのだ、そのやうに殊勝に清らかに念佛申す功德によりて淨土往生の利益を獲るのだ、といふのではない。心常に散り乱れ行常に恣にして所謂清い念佛など申すことのできない、あさましさ限り知られぬ罪業の凡夫をこそ懲れみ悲しみて必ず救はすには措かないと誓はせられたのが念佛であらせられるその如來の誓願が清淨眞実であらせられるから念佛が清淨眞実なのである。こちらが汚れきつてゐて嘗て清い心になりきれず、清く念佛申し得ず、偶々念佛まうしても直ちに雜念に亂されるを免れ得ない、このどうともしてみやうのないあさましい相をみそなはして悲しみ懲れみ、必ず救ふと誓はせたまふ如來の本願であらせられ、その本願がそのままに作用きたまふのが念佛であらせられる。本願が清淨にして些の汚垢も含まず、眞実にして些の虚偽をも含まないから、念佛また清淨眞実にして些の汚垢虚偽をも含まないのである。

如來の本願は如來がわれらあさましき苦惱の有情を悲しみ懲れみ救はんと誓ひたせたまうところから發させられた、その本願の現実の御作用、即ち本願が直接にわれらの身にはたらきたまふその御作用が念佛であらせられる。本願そのものは如來の御心の中の事であつて、われらの知り得る限りではない。その不可思議なる本願がわれらに直接に作用しわかれらを往生せしめてくださる御作用が念佛である。往生はもとよりわれらが淨土にまいることであるが、其はもとより無明

佛を方便とし手段として修め行ひ、其の功德として彌陀のおんたすけを得ることなのではない。

念佛は南無阿彌陀佛である、如來の名号である。如來その本願をわれらに告げ知らせ、われらを攝め取らんとの御名告りである。如來即ち南無阿彌陀佛となりてわれらに來り顯はれ、その本願を告げてわれらに聞かしめ、以てわれらをわれらの久遠の迷ひの古里。煩惱に燃え罪業に狂ひて自ら傷け他人を害ふ境界から離れ出でしめ、常住の覺りの境界、自ら清く他を清め清めて安樂ならしむる淨土に導き入らしめんとである。既に本願をおこしたまふても御名と成り、念佛と成りてわれらに來り顯はれたまはねならば、われら如何して本願を聞きまゐらせ得よう。又たとひ念佛申してもその御名にこもれる本願の眞実を聞きまつらないならば、われら如何して如來をたのみまつり得よう。南無阿彌陀佛と顯はれいでたまふ本願の眞実一つこそわれらの往生の唯一道である。耳ある者は南無阿彌陀佛の聲を開け、眼ある者は六字の名号を見よ。耳に聞き眼に見るそのひとたびの縁といへども、單にいたずらに起こつたのではない、如來のわれらを救はんとの久遠劫よりこのかた積み來たまひし御勞苦の現はれに他ならない。あれ「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案すればひとへに親鸞一人がためなりけり」との御述懐は即ち「ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおぼせをかうぶりて信するよりほかに別の子細なきなり」との御告白と一つに相照らして、祖師聖人の念佛往生の信をわれらに聞かしめたま

ふ永遠の御語であらせられる。この御語のままに南無阿彌陀佛の名号をいただく、ここにわれらの唯一道がある。

如來が「苦惱の有情をしてすして必ず淨土に往生せしめんとの願を作したまふた、その大悲の願心を成就したまふたのは「廻向を首としたまひて」である。廻向を首とするとは即ち南無阿彌陀佛の名号と成りてわれら苦惱の有情に臨み顯はれ、名号の徳をわれらに恵み賜はることである。名号の徳は即ち如來の全徳である、われらを救はんがために五劫に思惟し永劫に修行したまひし御労苦御功德の全体である。如來その全徳をわれらに恵み賜はりてわれらを如來の無漏のおんさとりに同一ならしめたまはんとする。廻向とはめぐらしむけると云ふ、如來の修めたまへる徳をわれらに廻らし向けたまふ、即ち恵み賜はるのである。われらが自ら修め得た徳を如來の方に廻らし向けささけるのではない。煩惱罪業の凡夫には如來にささげ得る何物も無い。ただ如來のおん恵みの徳をいただいて念佛申すのみである。是れ如來の廻向を身に

昭和廿五年八月廿六日

坂町、湯沢華室にて構す

天地にみつるところの大引き道をあかさんね
がひたたひとすぢに

よき人のかけしめます法の灯ゆほのほの
しらるわがとはのやみ

阿彌陀佛のみ誓ひゆゑに天地のおのづからなるしげけさにいる

——白井先生詠——

法喜に思ひ上る心

山 下 成

「ただ念佛して」と祖聖の仰せられし様に、その結果をか

へりみないまでに、念佛一つに生きぬかせて頂くことの外に信仰はないと思ひますが、たまたま聞法の功成りて獲信の幸慶に浴しますと、久遠劫の初事に、最勝の直道に、煩惱を断ぜずして、涅槃分を賜はるまれな法悦に、手の舞ひ足のふむところを知らぬまでに、泣血感謝する事に轉成せしめられることは、知る人ぞ知る事実であります。

然し元來が功利心の塊であり、執着の念の外に我なしといふべき吾等凡愚人は、そのはなはだしい轉換にともなふ、底知れぬ信業にまどはされて、醉ひきつて、油斷をし、知らず知らず、佛願の生起本末を輕視し、又は打ち忘れて、いささかも敬虔の情なく、その法喜のただならぬに驚倒して、知らず知らず自己を飾るべく、佛をも利用し、佛を駆使してゐるが如き、浅間しき橋慢又冒瀆の愚劣さに退轉してゐる事を知らるることのある事を猛省せねばならぬと存ずるのであります。このことは「ともかくも、迷いの頭巾ぬぎさて、悟りの頭巾またかぶりけり」と古歌にあるが如く、新らしい法喜に執着して、現実の自己を見失つてゐることになるのであ

だ

相でス。其故に古傳の詳れる如く「終日能行すれども所行海を越へず」であつて、われら如何に念佛まうすとも悉く是れ我が申す念佛なのでなく總て唯如來の申させたまふ念佛に他ならない。嗚呼、如來われらをして念佛せしめたまふ。われら煩惱熾盛、罪惡深重の身にてありながら如來の廻向をたまはりて如來の徳を行ぜしめられ、茲に安らかに淨土往生の大道に立たしめられる。何といふ不可思議、何という幸運であらう。

以上、初に掲げまるらせたる「如來の作願」の和讃をいただきつつ胸裡に徂徠するひそかなる想ひを記しまるらせ、以て花田法兄の御病床に寄せまつる。もとより未だ記し足らぬ所の特に大悲心の「成就」といふ御語について存するを覺へるけれども、今は暫く筆を擱いて他日を期することとする。もし法兄の御病床を慰めまるらせて得るならば至幸である。

信の上からは、いよいよ自己の罪惡性を知らせて頂き、わが身心何一つもあてにならぬ現実相を見つめつつ、いよいよ、「よろづのこと皆もつて、そらことたわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞ誠にておはします」との祖訓を心から味嘗する身の上になつた以上は、「迷情の四句共に非なる」凡夫の心の轉変限りなきを知らずして、一度獲信の意況に浴すれば、それで万事卒業したやうに思ひ上り、心上に起りし未曾有の体験を過重に評價し、その法喜の持続すべきものであると思ひ上り、正定聚の夫人といふ免狀でも頂きしやうに考へてるのでありますやうが、然し凡愚人の宿業が如何に現はるるか、一寸先をも見透し難い無眼の身であることを忘れて居ても、その宿業そのものはその思ひの如何にかからず、時々刻々に我が身辺上に展開しつつあり、偶々佛鄉非違にして心障を寒からしむる業報に出会いへばタツ々今迄希有最勝を頂きし法喜も、春の雪の様に、忽ち跡形もなく消え去ることもありましやう。かかる場合は未だ曾て経験せざる寂莫又焦燥の身邊に迫り來つて、爲に信を忘れ、念佛も出でず

一塊の悪魔に退化する外ないのです。その失望、その落膽、前日の喜びの深かつた丈け、その悲みも深いものがありましやう。されば法喜を力とした假の安心は眞宗の正意にあらずして罪福信の域を出でるないのでしやうか。さりとてかかる法喜の根底から絶滅したやうに見ゆる心状から察して直に未獲信のものと見るは早計極まるものと思はれます。

御本願一つ、又お念佛一つに安住して居てその轉換を喜んで居ても、その自然に湧き出づる心の一轉向なる法喜そのものに腰掛けんとする迷情の爲めに、偶々一時茫然として自失したるに過ぎないのであつて、かかる辛き体験を通してこそ法喜に陶酔し、大悲を忘却せし愚惡身をいよいよ却つて見捨てたまはぬ佛陀の御本願なりしかと自ら氣づき來つて却つて信を深める妙方便に轉成せしめらるに到るのであります。

法喜に陶酔し、大悲を忘却せし愚惡身をいよいよ却つて見捨てたまはぬ佛陀の御本願なりしかと自ら氣づき來つて却つてたまはぬ佛陀の御本願なりしかと自ら氣づき來つて却つて

あつて、自他共にそれこそその未信を証する所以であります。故にその法喜の一時消失の故を以て、すでに賜はりし佛陀の惠沢を打ち消さんとするが如きはいみじき計度の心でやうか。蓮師も「極樂はたのしどとききて參らんと願ひのぞむ人は佛にならず、彌陀をたのむ人は佛になる」と慈訓を垂れて下さり、「金剛堅固の信心は佛の相続よりおこる」と祖聖も御讚仰遊されて居られます。

法悅に思ひ上りて佛様を軽視し、又々迷を重ねるより外ない凡愚性をも、かねて知ろしめして久遠の昔より、あくまで捨てぬと呼ばれつてある大悲心を聞きまつれば、イヤハヤそれ程に限りなき御眞実の親様にましませしかと、いよいよ懺悔

聞思錄

故・舉田 豊

○ 信仰とはわが思ふ如き結果を得ることにあらず。不如意の中にありてお慈悲に満足することなり。

感化の祕訣は多くの人に交ることにあらずして、常に佛に接するに在り

我々は時間と空間といふものに迷ひ、如來を遠い昔、遠い處に眺めている。如來には時間も空間もない。如來

○ 人に捨てられまじとて無理に學問を励み、新知識を漁る其心根いと哀れなり。人に媚び阿ひ、捨てられまじとてなりわれは凡ての人に捨てられ、唯一の佛に済はる、ここに慰安あり。佛に済はれ、導びかれて最後の一息まで努力す。かくて世間の取捨に超越す。

○ は今ここに儼としてまします

○ 人の業報によつて日夜惡業を重ねつつあり、佛様は微塵世界に光明を放ち、各人各自を一御照覽しましまして、殊に惡性の者、將に水に溺れつてある者を先づ救はねばと、無始以來、忍終不悔の大行を今も続けて居て下されます。豈一妙好人の眞似までして、所謂法喜を加へんとする野心を起す遑あらんや。唯々仰ぐのみ、佛法とは仰ぐことなり」と苦言を呈しました。安心いらすの大安心、法喜いらすの大法喜こそ誠に望ましきことであり、佛様は必ず衆生の意の如くして下さると附言したのでありました。

○ と感謝の外はありません。佛様は凡夫の執着性の根強きをかねてより御覺になつて、「出没極まりない汝の一時の法喜に執着するな、我の普遍不滅永遠の眞實に帰せよ。さればその極惡性そのままで極善性に轉するであらう」と仰せられる。「汝の自我よりする分別を捨てて、我が大我の心に全托せよ」とは何たる大慈でありましやうか。この御眞実心を頂ければ、譬へば砂糖を味ふと同じである。一度砂糖の甘味を感得したら、その甘味が舌端に残ると否とにかかはらず、その味は到底忘ることは出来ないでしやう。今もその如く菓子が口邊に入れば甘くも感じましやうが、その縁に触れねば一時甘味を忘れて居ります。然し心の底にはその妙味を忘却しがたわけには行かないでの、御縁にふれては何時でもハツキリその甘味を思ひ出しうるやうに、一度身についた御念佛の妙諦は永久に忘るべくもありません。かといつて行住坐臥いつも称名しうるわけでもありませんが、心の底には大悲の佛様は名号として吾等凡夫の心の體まで染みつき、恰も火の炭についても同様、離れんとして離れるに由なく、常念佛の衆生として下さるのです。この大功德こそ、佛の因位の昔から正覺遊されるまでの五劫、永劫の御苦勞の賜であると、しみじみ感戴するに到れば、自ら口邊にお念佛の湧き出でて、その称名に即していよいよ佛德を思ひ出させて頂き、いつも忘恩懈怠の凡愚人を御見捨てなき五劫思惟の御本願と十劫正覺の大業力を唯々感謝信順し奉る外ないことでありましやう。凡夫としてはからふべき何ものもなく、義なきを義と頂き、佛

愛別離苦を縁として

三 瓶 德 英

本年五月妻を亡くいたしまして、この愛別離苦が御縁となりまして、幾つも幾つもの彌陀大悲の有難さを味はさせて頂いています。目に見える遺品の数々。親戚知人、御同朋からのお心からなる御哀悼等、一から十まで大悲照護の御顯現と感ぜられて、淋しい悲しい思の中から、称名念佛に勇み立たせて頂き、一人だけれども、どうも一人ではない様に思はれて、何となく心強い不安のない境地を迎る氣持で日夜を過して居ります。

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、來世さとりのまへのえにしを結ばんとなり。我おくれなば人に導びかれ、我さきだたば人を導びかん、生々に善友となりてたがひに佛道を修せしめ、世々に知識として共に迷執をたたん」

との唯信鈔の仰せが、只今の私には特に有難く頂かれます

「無始流轉の苦をして、無上涅槃を期すること、如來二種の廻向の、恩徳まことに謝し難し」

と祖師聖人が御示し下されてあります、亡妻アサヨ事、

本年五月一日十時、六十九歳を一期として、永年の病艱をす

て安らかに往生させて頂きました。

死の三十分位前、意識が明瞭らしいので、近角先生から德田潔氏への御法語の「心細く覺ゆる事も、行く先のわからぬ事も、何事もしろしめず如來の御慈悲にて、あくまで吾等がためにあらはれ給ひし、五劫思惟の本願にてましまし候へば親鸞一人が爲なりけり」との仰は「先生一人がためなりけりアサヨ一人が爲なりけりと、聖人の御跡をしたひ参らするの外これなく候」と聞かせました、其時は苦しみの頂上らしい中から、唇を少し動かした様に感じました。

四十八年間の夫婦の縁は断絶しても、共に御慈悲を聞かせて頂いた御同朋としての強縁は、永遠に相語り、相護り、相援けて絶ゆることなきを深く信じ、無上の幸慶を覺へます。然しかくよろこばせて頂くその下から、相變らす時々念佛させて頂きながら無軌道な生活を続けて居ります。

嗚呼、死、死、死んでゆく者に対しては引き留める何の力も方法もありません。親に別れ、子に別れ、夫に別れ、妻に別れ、兄弟、朋友、有縁、無縁の人々の死に遭遇せられた方の體験された活教訓は皆、死の前に人間の力の全く無力で行詰りを教へられてゐる。尙よく考へて見れば、人生の萬事、

一生の努力も詰局死といふ大詰の行詰りに追ひ遣られる道行が私共の日常生活でありますから、この行詰りの打開を切望し、救ひを求める宗教心がおこるもの自然であつましやう。二河譽の三宝死は行詰りの極致であります。「行くも死せん、返るも死せん、とどまるも亦死せん」何ともかともして見やうがない、其時にこそ始めて、积迦彌陀二尊の遣喚の聲が聞へて、行詰り打開の道が決定するのであります。これは行詰つた者の力ではなく、行詰つて苦しみ漢搔いて居る有様を御覽なされた大慈大悲の御方が、如何にも氣の毒で可哀相で捨て置けぬ爲に喚びかけて下さつた御眞実に氣付くと同時に、ソウカ！よし行かうと覺へす識らず行詰りを越へて勇猛精進することが出来るのであります。

闇路行く、我は二河譽のよび聲に

不安とられて心強くも

と詠んで見ました。

去る七月一日から山口縣の松村繁雄先生に三日間、亡妻追

悼法話会講師として来て頂きました。從來のお寺参りの常連にも感銘深いものがあつたやうですが、有難いことには八九

人の若い人々が眞剣に聞いて下さり、三日三晩先生は不眠不

正しき智慧によりて解脱し、安穏なる人の

心も語も行も亦靜かなり

法 句

經

村にあれ、森にあれ、くほ地にあれ、高地

にあれ、聖者の住む地はいづこもたのし

○亡き妻は心に生きて我をまもり
念佛せよとてつきまとふかも
○子はなくも親なき人をなかりける

佛は御親、南無阿彌陀佛

一二五、七、一二五、稿、

信 味 點 滴

編

著

久遠劫よりの業報により、善だ悪だとしこけに振舞ひながら、一切は罪業の因より外はない。

生きたい、生きたいと願ひ乍ら、一刻と墓場に近づく外に逃れ道もない。

前者の必然の果は苦であり、後者の当然の果は閻である。苦より苦に沈み、閻より閻に入るのが、避くべからざる、離るすべない我が実相である。

その一切をやむなきこととしてあきらめきれる人々には解脱も救済も無用であるが、あきらめもならず、解決する力もない、全くして見やうのない者にこそ、本願の大悲は全分の光芒を放つて、暗を破り、苦を滅して下さる。

家と家とにはさまれて陽も照らぬ長屋裏の庭に一本の糸瓜が生え、隣りの壁をつたつてヒヨロヒヨロと難儀して延び上つた。朝餉のあとフト見ると黄色の花が二つ咲いている。ひなびた花と葉の緑が絵のやうに美しい。チット見つめていると小さな蛾がしきりに蜜を吸っている。

蛾はどうして花を見つけたのだらう。不思議でたまらぬ。

家と家とに四方をしきられた庭、陽も碌にあたらぬ庭に今日

て下さるところである。更に我として加ふる何物もない。「拂ふべき塵一つなき」本願の成就である。

嗚呼正覺の一念なる哉！このところを南無阿彌陀佛と名告めしらしめて下さるのである。吾等が往生の成就を南無阿彌

陀佛とあかししめし下さるのである。志のある方々は蓮如上人の御勧めを頂かれて安心決定鈔を御讀願ひたいものです。

妙佛智なり

と覺へず讚嘆した。

先月、正岡子規居士の重患最後の書、「墨汁一滴」と「病

偶然咲いたばかりなのに！

「花無心に開き、蝶心なくして來る」と詩人は言ふ。無心と無心の交流するところ一つは蜜を得、一つは蜜を得。

難治の痼疾に障へられて、破屋方丈に閉ぢる外ない身に、大いなる道を教へられた。私のはからひを越えて、大いなる御はからひの世界を如実に知らされたことである。

安心決定抄は蓮如上人四十年の間、繰り返し繰り返しお読みになり、緯編七度たたれたと「御聞書」で教へられ、粗雑にして杜撰な拜讀しか出来ぬ私の惡癖を思ひ、せめて意譯させて貰へばすこしでも注意して拜讀させて頂けるかと願ひ、やつと大略の意譯を終へた、その後に

○往生は成就しけりとよろこびにあふるる彌陀の正覺の声と歌の道も知らぬ私乍ら御讀仰申したことである。

「衆生往生せばわれ正覺ならじとの大願成就の一念！」

ここ一つが衆生往生の根源である。「日は出でて夜の闇は破られ、月は出でて法界の水に影を宿す」ここ一つを世尊を初め奉り、三国七祖聖人の傳々相承し、吾等に告げ知らしめ

た時も、面会謝絶の閑かさを機会に読んだものである。そして佛境の一端をかすかに知らされた。十年後の今日病閑を得て再讀した。今度は異様の感を受けた、それは居士が死を前にし、立つあたはぬ事はもとよりの事、その慘怛たる苦患の間に處して、生きながら死にきつた居士の大活動の姿である

生きながら死にきる人の活動は、摩柯不思議なり。

蛇の頭と尾とが、互に己が前に進まんとて争うてをつた所が、前例もあるからとて、頭が前になつて進まうとしたら、尾はシツカリ樹の幹に巻きついてすこしも進まぬ。

そこで頭もこまり果てて、今度は尾を前に立てて進ませたところが、尾には肝心の眼がないので、遂に火の坑にはまつて焼け死んでしまつた。

○
先る處に五人の男がいて、互に相談の上で、一人の下女を雇うた。

男世帯のこととて下女が来るなり、先づ一人が己の着物を洗つてくれと汗染んだ浴衣を出し、他の一人も己のも洗つてくれと汚れた物を出した。又他の者もそれぞれに頼んだ。

下女はハイハイと承知して先づ最初の男の着物から洗いにかかると、次の男は、己のものを後廻しにしたとて、大いに怒り下女を叩いた。かくて五人が交る交る、己のを後廻しにしたとて打ち続けたとのことである。

私共が五欲にかられて、晝夜休みなく、命からがら忙しい

忙しいと勤めているのは全くこの憐れな下女と同様である。

編集後記

世界の情勢は知る由もないが、民主、共産の兩派に分斷されて世界の隨所に暴風が渦巻いてゐる事は明らかだ。そこに勝つ者、負けた者、殺す者、殺される者、人の子の住むところ涯しなく展開される悲惨事を見る。

り得ない。

だが「我はなり、彼非なり」だけの世界の何處に安らぎがあらう。ここには寒風吹きすさむ荒野にさまよふ宿なしの旅人でしかあ

り得ない。

唯一つ廣大なる佛の御眞美は、勝つ者の慢心を碎き、負ける者の卑屈を洗ひ、殺す者の罪を懲滅し、殺される者に光明を與へてその完全なる救済を完うして下さる。

仲秋の好天氣、涼風肌に心地よく、澄空目に爽やかに、如來憶念下の慈懷に称名讚仰申すことであります。

十月末に移ります地は、名古屋市南区駄上町三丁目八十八番地で鬼頭康彦氏の北隣になります。一道庵と名づけました。大經の「唯佛一道獨清閑」と歎異抄の「念佛者は無碍の一一道なり」の一道を頂きました。煩惱熾盛な者の佛陀無窮の願力に清閑を惠まれ、病魔萬事に障り多き煩惱具足の身に無碍の光景をかうむつて、念佛させて頂く場所の意であります。十一月にもなれば落着くことと存じます。故御來庵をお待ち致します。市電は新郊通一丁目下車、東へ半丁變電は呼続、常滑線は大

江、雀線は笠寺駅下車が便利であります。
マ「如來の作頬」は白井先生が病床を御見舞ひ下され、私の痛苦を御推察下さいまして、御起稿下さいました。

あれを思ひ、これを思ひ、はてしない涙泥

の苦に、自らの業報によつてあえぐ身を憐まれて「苦惱の有情」と呼び給ひつつ「廻向を首とし給ふ」作頬の大悲を光被下さいました。特に「目あるものは名号を見よ。耳あるものは名号を聞け」と切々御示し下さることろ涙の外はありません。

マ「法喜に思ひ上る心」の山下先生の御原稿

は、「人はあがりあがつて落ち場を知らぬ」と蓮師が御誠め下された御心にも通ふことであります。

貧者が幸に富者の恵みで豊かな生活が出来たにしても、もとより貧者の力ではありません。自分は飽くまでも食者であるとの「落ち場」をよく自照せねばなりません。「滌拂の漱がそのまま甘さ哉」であります。一凡夫の悪しき心をそのままおきて、如來のよき心を加へてよくめされ候」で何處までも眞面目より外ない私共は、ひととへに本願を仰ぐばかりで、結果に用事のないことあります。

△三瓶師の御原稿は本年五月一日六十九歳の奥様の安らかに念佛成佛遊され、四八年間の白道のよき伴侶を失はれ、孤影悄然の中に

佛の中からうなづきうなづき聽聞せられ、天親章まで進められて、遂にしづかに念佛の息絶へられたと承ります。謹んで深く哀悼の意を表し、かねて園林遊化の光益を篤く謝し奉ります。

(花田記)

昭和二十五年十月十日印刷

昭和二十五年十月十五日發行
毎月一回十五日發行

定價 一部金拾五円 (郵稅共)
一年分金百八拾四(郵稅共)

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九

編集兼
發行人 花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷人 本田正雄

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和局區内幸樂町二ノ二九

花田正夫方

發行所 慈光社

振替口座番號 名古屋一〇四七〇番